

金属器と弥生土器を使い、(1)をおもな生業とする文化を弥生文化とよび、日本列島に定着した時代を弥生時代といい、前期・中期・後期の三期に分けている。(最近、早期を加えた説もある)北九州にはじまった(1)は、前期には西日本一帯に広まり、日本海経由で本州北部にまで伝わった。また、北海道では狩猟と採集による(2)文化がつづき、沖縄など南西諸島では水稻農耕は伝わらず、畑作と漁労による(3)文化がつづいた。

(1)は、前期には大陸製の鉄製農工具も少なく、水路をつくるには一つの集落だけでは労働力が足りなかったため、川に近い低湿地に簡単な灌漑施設をつくった小さな(4)が中心であったが、中・後期には(5)の開発も進められた。耕作にはおもに男性がたずさわり、彼らは、磨製片刃石斧で加工した木製農具を使いながら、田植えや籾の直播きをし、生育が不安定なうちは(6)で穂首刈りにして収穫した。収穫した稲穂は薄手で赤褐色の弥生土器に入れて貯蔵穴や(7)倉庫にたくわえ、おもに女性が必要分を木臼と(8)で脱穀した。

稲作によって生活は安定しはじめたが、気候の変化に大きく左右されたため、いぜん狩猟や漁労・採集も行なわれた。また、豊作への期待や感謝をこめる農耕の祭りが共同で行なわれ、祭りの道具として(9)や銅剣・銅矛・銅戈などの青銅製祭器が使われた。

集団どうしで灌漑用水の利用や土地・交易をめぐる争いや、生産物や鉄器などを奪いあうはげしい抗争もおこった。周囲に濠をめぐるした(10)や、見晴らしのよい山頂や丘陵上につくられた(11)などの防衛施設もみられるようになった。

死者は、共同墓地に埋葬された。一方で、盛り土を盛った墓が出現したことも弥生時代の特色である。方形の墳丘の周囲に溝をめぐるせた(12)や四方に突出部をもつ、山陰地方で見られる大型墳丘墓である(13)の出現は、集団の中に身分差が現れ、強力な支配者が登場したことを示している。

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13		